

越智敏裕氏

越智源(株)代表取締役・愛媛県繊維染色工業組合前理事長

タオルの製造において重要な工程である染晒加工。今回は、タオルの製織工程をおもに担うタオルメーカーではなく、準備・仕上工程のうち染晒加工をおこなう染色加工業者にスポットをあてて、今治ではどのようなプロセスで染晒加工が施され、タオルの分業体制が確立しているのかを、越智源(株)をとおしてみていく。越智源(株)は、1925年創業の今治では老舗の染色加工業者であり、今治タオルの発展の一翼を担ってきた。昨今の業界をとり巻く激しい変化にもかかわらず、三代目越智敏裕氏の先を見据える眼差しは熱い。越智氏いわく、「ようやく、染色加工業者の技術がものをいう時代が到来した。」




越智敏裕氏

おち・としひろ ☆ 1940年、今治市生まれ。1963年、東洋大学経済学部卒業後、祖父が1925年に創業した越智源(株)（創業時は越智染晒工場）に入社し、1989年、同社代表取締役に就任。今治の染色加工業界で有数の企業に育て上げる。33歳のとき愛媛県繊維染色工業組合理事となり、その後1981年副理事長、1998年理事長に選出され、現在も同組合の運営に力を注いでいる。



1. 染色加工業とは

お客さんにモノをこうてもらわない、技術をこうもらうのがこの業界や

タオルはさまざまな工程をへてつくられるが、その工程は産地の特性や時代のニーズによって変化してきた。まず、産地の特性における伝統的なタオルの製造工程を図でみてみよう（図1）。タオルの二大産地といえば、今治と泉州（大阪）である。今治では先晒さきざらしタオル 、泉州では後晒あとざらしタオルを生産し、歴史的にある種の製品の棲みわけをしてきた。

タオルの製造は、準備工程と製織工程と仕上工程の、大きく3つの工程に分類できる。先晒タオルは、準備工程でタオルの原料となる糸（原糸）を晒して染色を施し糊付をおこなったうえで、製織する。一方の後晒タオルは、糸を加工せず、製織のあとで染色や晒、捺染（プリント）加工などをおこなう。

このように染晒加工においては産地別に特徴をもっていたが、1970年代以降のタオルの高級化・多様化にともない、デザインのみならず機能性も重視されるようになり、今治の先晒タオルでも仕上工程において染晒加工が施されるようになった（図2）。製織後のタオルを晒すことによって吸水性が増し、タオルとしての機能性がより向上した。こうして現在では、今治の伝統的な先晒タオルは、時代のニーズにそって準備工程と仕上工程で染晒加工がおこなわれている。

染晒加工といっても、その作業はさらに細かくわかれている。準備工程では、最初に、原糸を染めやすくするために総糸かせいとやチーズ巻き、ビーム巻きに加工し、つぎに晒加工にあたる精練漂白（晒）をおこなう。これは、糸に含まれている不純物を取り除き、色素成分を分解する作業である。その後、総糸やチーズ巻きなどそれぞれの

形状にあわせた機械によって染色される。現在、タオル用に使用されている染料は、主として反応染料とスレン染料である。染色後おこなう糊付は、製織するときに糸と糸、あるいは糸と^{おさ}箆が接触することで摩擦を起こして毛羽や毛玉になるのを防ぐためである。糊付に用いられる材料は、おもに油剤（ワックス）または小麦粉である。最後に、糊付された糸を乾燥させてから糸巻き替え（整経・管巻き）の作業をおこない、準備工程での染晒加工は完了する。仕上工程では、製織されたタオルの糊抜をし、晒したあとに染色する。染色に使用される染料は、準備工程とおなじ反応染料とスレン染料である。上記の工程でぬれた状態にあるタオルを乾燥させれば、仕上工程での染晒加工は完成である。

図1 タオルの製造工程

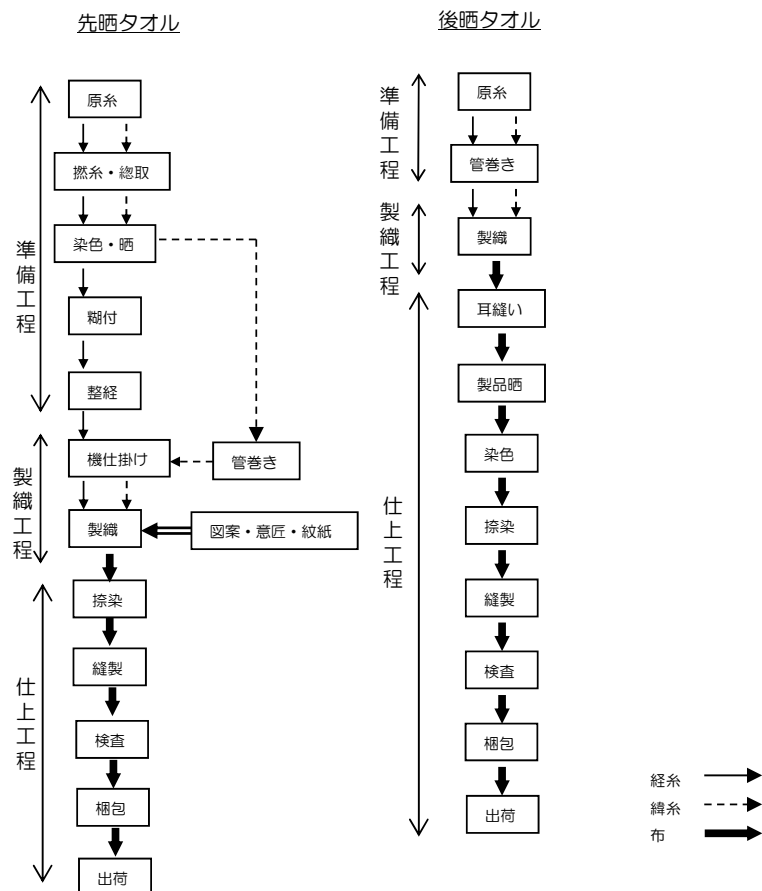
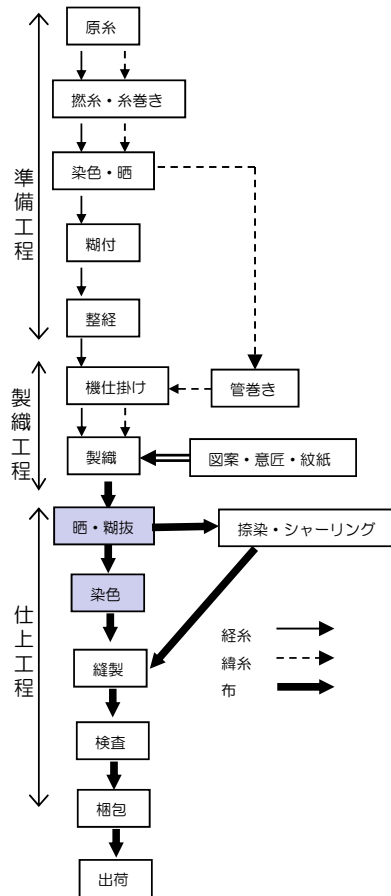


図2 現在の先晒タオルの製造工程



タオルの製造においてはタオルメーカーがおこなう製織工程が注目されがちだが、準備・仕上工程で染晒加工をうまく施さないと製織がスムーズにすすまなかったり、商品の段階でタオルの質や風合いを損なったりする。つまり、染晒加工は、製織と同様に、特殊な技術を要しタオルの良し悪しを決定する重要な工程なのである。

今回とり上げる越智源(株)は、今治タオルの製造において染晒加工を専門におこない、戦後の今治タオルの発展を産地内分業によって支えてきた老舗の企業である。同社の三代目である越智敏裕氏は、染色加工業界についてこう語る。「お客さんにモノをこうしてもらはん

やない、技術をこうてもらうのがこの業界や。」

染色加工業界と同業者組合については、のちほど越智源(株)の歴史とともに触れるとして、まずは越智氏とはどんな「タオルびと」なのか、つぎにみてみよう。

2. 幼少・青年時代

ガキ大将でわんぱくだった幼少時代、スポーツに夢中だった青年時代

越智敏裕氏は、越智源(株)二代目の賢^{まさる}氏の二男一女の長男として1940年に誕生した。地元の今治市立常盤小学校に通っていたときは、近所でも有名なガキ大将で、わんぱくな幼少時代をすごした。小学校を卒業したのち、今治市立日吉中学校、愛媛県立今治西高等学校へ進学し、18歳まで今治の自然のなかで伸び伸びと育った。

高校卒業後、東洋大学経済学部に入學し、今治から遠く離れた東京で新たな生活をはじめた。東京に行っても変わらずつづけたのが、スポーツであった。中学校からはじめたバスケットボールは大学の2年生まで継続し、3年生からはスキーに熱中した。いちど何かに没頭すると、とことんやるのが越智敏裕流である。スキーのシーズンが到来すると、志賀高原や蔵王など関東近郊のスキー場に通っては腕を磨き、プロ顔負けのスキルを身に付けた。「今治スキー連合会」の発起人が越智氏であると聞けば、なるほどその腕前とスキー好きがどれほどのものかが想像できる。越智氏にとって、スポーツは青春時代の大切な1ページであり、物事の楽しみ方を教えてくれた貴重な場となった。

一方、勉強の方はスポーツほど熱を入れたわけではなかったが、今治とはまったく違う環境のなかで大学生活を送れたことは、のち

に経営にたずさわる人間としてのセンスを磨くのに十分な経験となった。大学卒業後は東京での就職を考えていたが、急きょ今治に帰ることになったのである。（次号につづく）



学生時代にスキーに興じる越智敏裕氏